あとがき

（近代鍼灸制度百年に向けて）

本研究会の開催に弾みをつけたのは、世界思想社刊の『～学ぶ人のために』や関連する医療社会学の文献に接してからであった。なるほど、こういう学術的なスタイルでディスカッションを深め、その結果として文献ができるのかと。医療社会学で草分けであった佐藤純一氏は文献で鍼灸にも言及されていて、時折、『医道の日本』誌でお見受けすることがあり、いずれ日本の鍼灸について直接ご意見を伺うことができればと思っていた。しかし、我々にはまだ佐藤氏を迎える土壌はできていないと形井代表は考えていた。

2009年『医道の日本』新年号で、佐藤氏は「医学医療は成熟すると自分を語り出し、語り始めることで成熟していく」と、そして氏にはまだ、鍼灸の語りが聞こえてこないというのであった。それでは、日本の鍼灸の語りの一部を聞いていただこうと、第４回社会鍼灸学研究会にご講演およびご助言いただくことを提案したのだった。

第４回研究会は、佐藤氏のおかげで「医療社会学」の学際的な力を本研究会へ注入していただき、ディスカッションにも熱が入り、実り多いものになった。後日、「鍼灸の語り」について、佐藤氏からは鍼灸の「気」力あふれる一面を感じたという感想をいただいた。

しかし、それとは裏腹に、近代からの日本の鍼灸の変遷を知り、語れば語るほど嘆かわしくなってしまうのは何故だろう。戦後、近代斯界の念願であった専門学校教育を為し得て、その後大学・大学院まで設立させたことに、山崎良斎をはじめ、当時熱く語っていた鍼灸師達は天国で胸をなで下ろしているにちがいない。だだ、当時、山崎らが鍼灸雑誌でたびたび問うていた鍼灸師の地位向上やニーズの喚起は勝ち取ったのか、学校教育と鍼灸師の資質は向上したのだろうか。近代に比べ、現代は鍼灸を取り巻く環境が劇的に変化している。世界の鍼灸状況を知るにつれ、「日本鍼灸とは」というその存在意義について焦りも出てくる。

ヴィジョンを考える上で、アメリカの自由競争社会におけるPHC（ﾌﾟﾗｲﾏﾘﾍﾙｽｹｱ専門職）としての鍼灸師の位置が一つの参考になると思う。私は恥ずかしながらアメリカ社会の体験はなく、ストレスフル社会を歓迎するつもりもない。だが、その出自がアメリカ近代民間医療やメスメリズムであったｶｲﾛﾌﾟﾗｸﾃｨｯｸやｵｽﾃｵﾊﾟｼｰが近代日本の療術に色濃く影響し、現代アメリカで社会的地位を確立したことがどうしても気になる。

なんとかしてこのモヤモヤをはらし、日本の鍼灸と鍼灸師の社会的定位置や地位向上について糸口を見いだしたい。

当初から本研究会に参加してくれていた伊藤和真氏、嶺聡一郎氏、偶然私の後に首都大大学院に入学してきた根岸とも子氏らがあつまり、社会鍼灸に関する調査研究プロジェクトが始まった。細々ではあるがこのメンバーを中心に形井代表を囲んで社会鍼灸に関する勉強会もスタートした。興味のあるかたは是非仲間に加わっていただきたい。

本研究会の成果はすこしずつ現れはじめている。研究成果を社会に還元できるような質に高めることにも心がけねばならない。1911年に鍼灸に関する全国的な初法令「鍼術灸術営業取締規則」が制定されてから2010年で100年目を迎える。我々はこの百年をどのように総括したらいいのだろう。

例年にくらべ気温が高く曇天がつづき、梅雨明けが待ち遠しい。周囲で流行っている感染性胃腸炎とやらは、きっと湿邪の仕業だろう。

2010年7月15日
社会鍼灸学研究会　箕輪 政博